

別に苦心
に工夫
する

料を給與するには及ばぬことである、世人が雛の餌料に苦心するのは全く根本を哺乳動物に考へて居るからであつて、根本の原則を誤解するに基くのである、然らば生後二日目から與ふ可き餌料は如何なる種類のものを給與するのが適當であるかと云へば、餘り粘着力の有るもの嚥下するに不相應な大なるものを除けば、成鳥と同様な餌料は彼是と撰ぶ必要なく給與して差支ないのである、即ち穀餌としては小麦、小米、粟、稗、挽割玉蜀黍、挽割麥、麩、面細、米糠、黍等を適當し、動物餌料の如きも田螺、蛭、蜆、雑魚、獸肉屑等成鳥に給するものと同様、又植物餌料も青菜水草等を細切したもの等、之れ皆雛の餌料として適應したものである、又鱈鰓屑等の煮汁で穀餌を煉り混ぜて與へるなど頗る適宜の處置なり、斯の如く雛の餌料は成鳥の餌料と異りたる點は更になし、去れば雛の餌料に苦心するは愚と云ふ可きなり、若し是に

同腹の雛
も必しも
同一の形
能の非ら
ずのみに

注ぐ丈の苦心を他の管理法へ注げば、充分なる育雛の成績を擧げて百羽百成の功を奏するであらうと思ふ。

第四 雛の淘汰及管理法

同一種禽の卵から孵化したものでも必らずしも同一形質の雛のみとは云へぬ、管理の善悪撰擇の適否其他種々の事情から、種々なる形質を備へたものが出来る、身體の大小體質の強弱類似不類似等總て異なる點があるから、之れに對して充分なる人為淘汰を行ふことが最も必要である、と云ふのは先づ身體の大小體質の強弱を以つてしても、大小の雛を同一育雛器で育てるとすれば、必らず小は大に壓せられ體質の弱きものは其強きものに制せられて、益々小となり益々弱となる、而して發育は不充分にて遂に斃死を免かれざるに至るのである、是等の

淘汰要件

場合には略ぼ同一の形質の雛を一群となす様に撰り分けて飼養せねばならぬ、最も極めて胚弱で發育の見込のないものは早く屠殺する方が利益である、例令成鳥するにしても良好な効果を收め得るものではない、故に次の如き二條件で區別し又淘汰することが肝要である、一、體軀の大小等しきものを一群とすること、一、元氣旺盛なるもの否らざるものと區別して等しきものを同一群とし、胚弱なもの、發育の悪しきものは屠殺すること、是等は雛を完全に發育せしむる上に於ても、優秀なる成鳥を得る上に於いても當然行ふ可きことである、其他種々なる關係上からも淘汰を行ふて、完全無缺の成鳥を得ることに努めねばならぬ、尙雛を保育す可き育雛器の清潔、外氣の状態雛の發育程度等に注意し、敷物の蓆菰等は常に乾きたるものと取替へ又は日光消毒を行ひ、羽毛鼻孔等の掃除も充分にして、常に雛が快く安全に敏活に

取扱ひ

生後七日乃至十日の取扱ひ

二十日後三日の取扱ひ

生活する様に仕向けてやらねばならぬ、而して生後七日乃至十日頃までは育雛器に於て飼育し、晴天の日風なき日などには日當り好き所に育雛器のまゝ持出し、雨天曇天又は風強き日には直接外氣に觸れぬ様、屋内にて飼育し氣温の程度に従つて寒温を加減し、七日乃至十日以後は伏籠又は柵欄を設けて外に出して遊ばしむ可し、一時に廣き所に出さず漸次に廣く遊ばしむる様にすること、此場合にも氣候の寒暑外界の状態に注意することは勿論である、斯くして二十日三十日と經過すれば、暖き日中一日一回五分間位は水泳を爲さしめ十分間十五分間と漸次に長く入れるやうにせねばならぬ、此際は雛が水中から上つて羽毛を乾すに適當な場所へ菰又は蓆等を布き、雛の羽毛へ土砂の附着せぬ様注意すること、此頃より直接外氣に觸れぬ設備をして育雛器より出し鴨舎に眠らす様に躑けて、漸次に水邊へ自由に放飼し四五十日

四五以後の取扱方
の習慣の

頃よりは成禽同様に取扱つても差支ない、而して雛の内には如何様にも習慣の付き易いものであるから、成る可く飼養の便利で都合の好い様な好習慣を付けることが肝要である、殊に朝夕の出入時間は日晷の長短にも依るが、可成朝は遅く出し夕方は早く入れる様にす、夫れは朝夕の冷氣に遭ふは健康上に害を及すのみならず、將來の産卵上に悪癖を残す様になるものであるからである、是等諸點の取扱方に深く留意して保育することが肝要である。

第五 餌器其他の諸注意

餌器及飲水器等の構造も種々なるものがあるが、養鴨には別に複雑な構造の餌器飲料水器などは要しない、水の漏らぬ据りの可い廣く淺いものなれば、箱桶金盥陶器類等何んでも可い、が、併し茲に注意す可

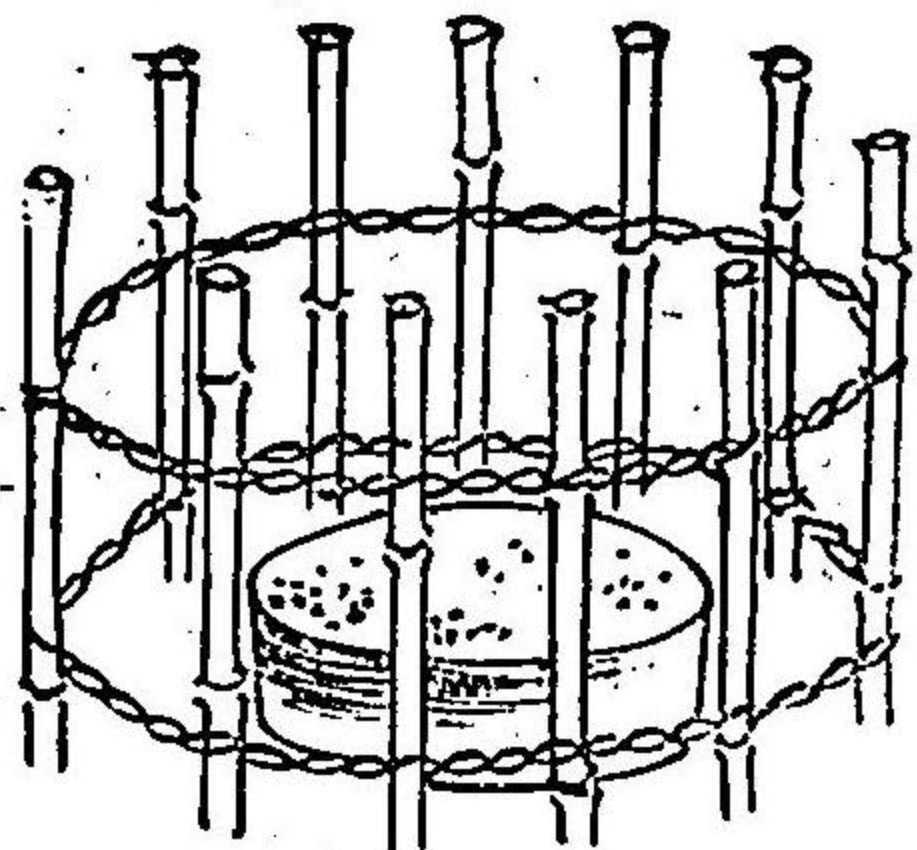
飲水器の構造

成禽用飼柵の構造

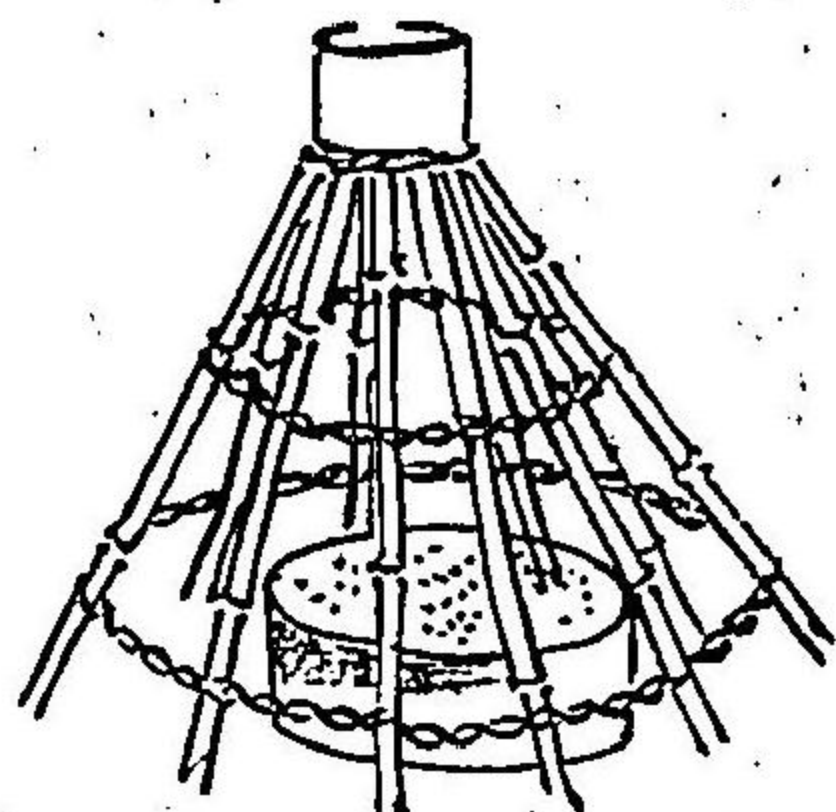
雛用飼柵の構造

きは餌器飲水器中へ亂入又は脱糞し若くは零すなどするものであるから、之れを防ぐ可き設備をしなくてはならぬ、夫れに最も安全なるは四寸幅位の長方形の柵様の箱を木又は塗鉛等にて作り、柵外に据付けて之に餌を容れ柵内より頸部だけ差延べて食する様にすれば、最も便利で亂入脱糞其他餌料を粗末にすることを防ぐのである、尙簡易なる方法は第十八圖の如く、小さき丸竹又は八分角位の木片を一尺位に切り之れを鴨の頸部の出入自由になる位隔て、鐵線又は竹の輪にて組み付け、其内に餌器又は飲水器を容れるのである、之れは製作最も簡易なれば

第十八圖 (成禽用飼柵)



第十九圖 (雛用飼柵)



其他の注意

何人も出来る方法なり、又第十九圖の如く六七寸廻りの丸竹の一方に節を残して五六寸の長さに切り、一方の節のない方を細かく割り雛の頸部が自由に出入する様な距離を隔て、金線又は竹の輪にて組み付けて作り、之れを餌器に被ふて雛用となせば輕便にて羽毛を濡らし餌料を零すことを防ぐことが出来る、尙餌器及飲水器等は毎夕洗ひ乾かし置き臭氣のないやうにし、又殘餘の餌は筧に上げて乾かし置き朝給與する新らしき餌料へ混交して給與すること、其他餌器の轉覆などせぬ様餌器に對しても充分注意して清潔にすることを要す。

第二節 自然育雛

自然的育雛法には母鶏代育と鴨自育とがあるが、母鶏代育は異種なる丈けに母鶏に依りては幼雛を害ふことがあるから餘り好良なものでは

第一 母鶏代育法

ない、鴨の自育は只單に覆育するのみならず、教育的に自分の習慣水浴其他總ての起居を躰けるものであるから極めて好成绩である、けれども鴨雛は育雛が容易であるから、矢張り人工育雛の方が得策である。

母鶏代育法

給餌方法

母鶏に托して育雛せしむる場合にも孵化後二十四時間位は其儘になし置き、然る後に巢より取出す此際は人工育雛の場合の如くして餌付を爲し、一日位は給餌も同様の方法と爲すを可とす、而して前項に示せし第十七圖の容雛器にて保育せしむるものとす、給餌法は母鶏には高く餌器を吊りて之に米小麥等の粒餌を與へ、雛には別に第十九圖の如き仕掛けの餌器に煉餌様にせる餌料を給與するのである、而して雛を母鶏に托す期間は二十五日間乃至三十日とす、其母鶏に托す可き數は

其一腹に孵化せし數であることは無論である、が、時と場合に依りては十三羽位を適度とし大形の母鶏なれば十五六羽までは差支ない。

第二 母鴨自育法

母鴨に雛を自育せしむるのは、習性が同一で有から頗る好都合である、此場合は餌付其他の特別給餌の必要はない、只人工育雛の場合の如き注意に依り鴨舎の一隅に育雛所を設け保育せしむれば足る、注意を要するは母鴨と共に屋外に出したる時、母鴨は水邊に雛を導くもので永く水中に置く爲め往々斃死せしむることあれば、水邊に導くときは注意して適度を見計ひて逐ひ上げ、蒹菰の上にて羽毛を乾かぬ内は直接地上に出さぬやうにせねばならぬ、又可成自由に水邊へ母鴨が導き能はぬ場所に放飼し、又時刻を見計ひて水邊へ放ちやるを可とす。

鴨自育の特別注意

第三節 育雛上の諸注意

一、育雛に最も注意を要するは氣温である、適度の氣温を與へないと雛の攝取した食物の消化を充分ならしめないから、遂に消化器病に罹るものである、一、育雛器及育雛場の温度は生後一週間若くは十日間は華氏八十度、其後からは發育に準じて七十五度七十度六十五度六十度と三四十日間に漸次に温度を下げて、遂には六十五度より五十五度位までにすること、一、夏季は可成風通の好き清潔な所にて育雛し温度の激變に注意すること、一、雛を右の掌にて其頭部を自分の方へ向け上より握り其まゝ掌を反へして見て、此時雛の全體が何所も同じ様で而かも弾力があるものは強壯である、腹部が硬過ぎるものは成長遅く、肛門の周圍の羽毛が濡れて居るものは健康に異状のあるものにて

育雛と温度

温度の漸下

清潔にす可し

検査方法

石灰質及砂粒を給す
梅雨中の梅手當
通氣の好換期
外飛のび切方
夜露に遭はす可からず

發育不良なり、一、餌料中に石灰質物と砂粒を缺かさぬ様にすること、一、梅雨中は温度及び外氣の激變濕潤等に注意を要す、一、通氣を好くすること、一、臍の緒の附着するものは厄弱にして發育力なき徵なり、一、生後十日乃至十四五日頃が最も斃死し易し、一、常に飲料水を絶やす可からず、一、生後六十日頃より換羽を始めるから、此際には營養分に富める消化し易き餌料を給與し、且田螺等を充分給し温暖なる所に置くこと、一、成鳥期に達すると風雨の日などには、外れ飛びをするものなきにしもあらざれば、羽翼強きものは第二十圖の如く片翼の羽を所々二三本宛透し切るか、または風切り羽を残り六七本位並べて切り放すか、何れにしても兩翼切つてはならぬ必ず片翼切り置くこと、一、元氣なく俊爽でなきものは外部の状態及食欲など檢し、群中より離隔して手當を施すを要す、一、夜分は必らず屋内

第十二圖 (透し切り)



に眠らす可し、夜露に遭ふこと長きに亘れば漸次風切羽伸長して飛び去る可し。

第八章 一般的飼養管理

養鴨の管理事項は隨時之れを關聯する項に於て附説したれば、今茲に此章を設けて説述するは蛇足のやうであるが、初めて副業的又は試験的に飼養せんとする人の爲めに便宜を思ふて之を説くことにした、養鴨業は養鶏、養鶩以上に飼養管理が容易であつて、我が國の如く捨て飼ひ的にするには頗る適當な家禽である、此捨飼的なる鴨に相當な飼養管理を施して充分なる飼養方法を施せば、此鴨に勝る家禽は

飼養管理
容易に
捨て飼
に適合

他に見ることは出来まいと思ふ、故に今茲に普通一般的所謂日本式の捨飼ひにしても相當の收利のある管理法を説述しよう。

第一節 飼養場と峙

飼養場は一般的に云へば天然の河川沼池を利用して、殆んど周囲の柵欄も施すを要せざる所を適當とす、又陸飼にすれば果樹園休耕の田畑其他の荒地を利用するを要す、尙一雄二雌位なれば飼養場と云ふ程の設備は要しない、流し下又は庭園などで充分なり、又峙も縁下又は物置き等の一隅へ菰又は蓆等を敷き獸害を防ぐ丈の設備にて足る、尙輕便なるは鴨を容れるに足る程の箱を用意して之れを峙と爲すも可なる可し。

殆んど飼養場の設備を要せず

第一 敷物と柵欄

鴨が夜分眠る所に用ゆる敷物は乾燥したる藁又は蓆菰穀等を使用するを可とす、柵欄は普通垣とする材料なれば何物にても可なり、高さ二尺位に柵を設くれば決して飛び去り又は飛越え能はず、それに農作物を害し床上等にするものにあらざれば、柵欄を設くるに費用手數等を更に要せず、三羽や五羽の飼養には是等の設備する要なし。

農作物を害せず

第二 水浴場と産卵箱

鶏の砂浴に代る可き鴨の水浴は、漸く其身體を容れ得る程度の桶盥箱等の水の漏出せざるものを土中に埋め、之れに水を盛りて置けば足る、併し常に其水の絶えざる様に注意して給水す可し、附近に水溜り

砂浴の代りに水浴

産卵箱
を用ふ
要なし

などありて自由に出入するを得れば是等の設備も要なし、只だ全然の陸飼にするには前述の用意をす可きなり、産箱も別段設備するの要なし、併し一定の場所に産卵の習慣を附ける爲には、藁屑などを多く埒中に入れて置けば自ら巢を営みて産卵するものなれば、箱等の用意は必要なし、最も多群の飼養を爲す場合は之れを設くるも宜かる可し。

第二節 飼料と特飼

飼料は農家其他の家庭に於ての廢物を利用して經濟的に有利な物を給することとを要す、併し出來得可くんば營養率及び熱量と容量とが伴ふものを給するを要す、而して今茲に各目的に依る特飼法と其飼料との關係を説述しよう。

第一 産卵期と飼料

採卵を目的とする鴨の産卵期に際しては、標準に適當した飼料を給與して、し田螺蛭其他動物餌と青菜水草とを充分に給與し、石灰質物及砂粒を缺かさざる様にし、尙食慾の減退せぬ様注意するを要す。

第二 換羽期と飼料

鴨は晩夏の頃より初秋に掛けて換羽を爲すものなれば、換羽期に入りたりと見れば平常よりは、營養分に富み且つ熱量の大きい飼料を給與するを要す、尙動物飼料をも給すること産卵期と同様、換羽と飼料の關係は大に密接なるものなれば、疲勞斃死病鳥などを出さざる様に注意す可きなり、新羽毛の發生するには多くの營養分を要するものなれ

青物を
缺ぐ可
からず

營養率
高く熱
量多き
飼料を
給す

ば、換羽期の永引くは營養分の不足を證明するものなり、故に營養分に富む飼料を給し靜なる所に於て飼養す可し、尙青菜水草等をも絶えず給す可し。

第三 肥臘と飼料

鴨を採卵用以外に屠肉用として肥臘せしむるには、薄暗き靜なる場所に雄雌を別々に分けて收容して、陸飼となして動物飼料及炭水化物を多量に含む飼料を多量に給與するを要す、但し市場に出す十日前よりは動物餌料を廢し玉蜀黍の如き飼料のみにて飼養すれば肉味佳良也。

第三節 孵化及育雛

孵化及び育雛は前述の如くなるも、普通一般の孵化は母鶏に托し育雛

陸飼に可とする

母鶏代利なり便

は人工にて保育するを最も便利と爲す。

第一 孵化の季節

春季好適
孵化の一定の季節と稱するを得ざるも春季を適當とす、普通は色情旺盛の時を撰べば有精卵多くして成績良好なるのみならず、母鶏も蟄巢の念が盛んなときであるから孵化に好都合である、故に春季が最も適應して居ると認められる、即ち三四五の三ヶ月、是れに次では小春日和の秋季で九、十、十一の三ヶ月である、而して梅雨季は氣候の最も悪しきときであるから、此季は避ける様にするのが得策である。

第二 育雛季の適否

自然の孵化期が春秋兩季を適當とすれば、矢張り育雛の季節も矢張り

梅雨季
を避け

寧ろ夏
當季が適

此季節を適當とするのである、けれども梅雨の季節は孵化に適しないと同様に育雛上にも不適當な季節である、冷氣を催し降雨多きを以て雛の保育には至つて困難のときである、而して冬季よりも夏季の方が育雛には便利である、人に依れば冬季が便利で寒冷低溫は人工で増温することが出来るが、夏季の暑熱は人工で減温せしむることが出来ぬと云ふが、是れは机上の議論に過ぎない、實際は夏季の方が容易である、と云ふのは鴨雛は冷氣よりも暑さに中りて斃死するのは少くない、のみならず暑熱は清涼な場所を撰びて育雛所となし、又は餌料等の加減で低溫に導くことが出来る、が、冬季の人工増温は却々面倒なもので、常に適温を保たしむることは困難である。

第四節 其他の管理

以上に述べたる一般的飼養管理の外に、之れに關聯する管理法の二三點を説述しよう。

第一 人工換羽法

人工換羽と云ふのは晩夏より秋季に於ける天然の換羽を、人為を以て換羽を春季に移さしむる方法である、夫は春三四月の頃鴨を捕へて凡そ三日乃至五日間を隔て、第一回に兩翼で被ふて居る兩脇部、第二回目には頭部、第三回目には背部、第四回目には腹胸部、第五回目には羽翼の軟毛、第六回目には尾羽と云ふ風に順次羽毛根を害せざる様注意して、鴨の羽毛を抜き去り其跡へヘットを少し暖めて薄く塗抹して置のである、此場合には皮膜を損傷し易きものなれば注意することが肝要である、而して雄と離隔して靜かな溫暖な鴨舎へ收容し、滋養に富

る抜き去

産卵期を變ずる爲めなり

んだ餌料を給與すれば自然新羽毛が發生するのである、これは春夏兩季の多産を秋冬兩季に移して、卵の貯藏を便利ならしむる爲めである。

第二 産卵期

鴨は春季より秋季の換羽期まで多産するものなるも、飼養管理と風土の關係に依つては、換羽期を過ぐれば冬季より春季に掛け連産するものであるから、冬季は温暖ならしめ屋内にて陸飼ひにすれば産卵す、此際の飼料は營養分に富み熱量高き飼料を與ふるを可とす。

第三 産卵休止法

これは普通の場合に施す必要なく、種卵に供する爲め母鶏の蟄巢する期に至るまで休止せしむるものにて、其方法は鴨の兩翼羽及び尾羽を

種禽に施す

春より多産も冬期も産卵す

引抜き、餌料の分量を平常より少しく減じ置けば産卵を休止するものなり、斯くて再び種卵の必要なる場合には其時を見計ひ、十日前頃より滋養分に富める餌料を多く給し、動物餌料の如きも適度に之れを給は、すれ再び産卵し始むるものなり。

第四 鴨の糞尿

昔より鳥は一穴と稱する如く、鴨も亦肛門より糞尿共に排泄するものにて、總て糞と尿とは混じ居れり其諸成分は、窒素分は主に尿酸鹽と云ふ化學上の形態を爲し、肥料として効力多きものなり、今其含有成分を化學的分析に依り示せば下の如し。

水分五六、六六%有機物二六、〇〇%窒素一、二〇%加里〇、六一%磷酸一、四〇%である。新鮮なる鳥糞を其儘使用するは、濃厚に過ぎ

窒素分に富む

て植物の根を損ふから、堆肥其他腐敗せしめて用ふるを可とす。

第九章 鴨肉及鴨卵

養鴨業の生産物たる卵肉は其原料たる餌料と、化學的成分を如左同うする者であるから、良卵肉を得るには好飼料を與へることを要す。

原料たる飼料

飼料の種類	水分		蛋白質		灰分		脂肪	
	小	大	小	大	小	大	小	大
小麦	一〇、五	一一、九	一一、九	一、八			二、一	
蜀黍	一一、九	一五、四	一五、四	五、八			四、〇	
玉蜀黍	一〇、九	一〇、四	一〇、四	一、五			五、〇	
結果たる生産物即ち鴨肉卵								
生産物名	水分	蛋白質	灰分	脂肪				
鴨肉	七〇、八	二二、四	三、八	三、〇				

飼料の係成肉分卵料と關の

鴨	卵	六五、七	一四、二	一一、二	八、九
---	---	------	------	------	-----

第一節 鴨肉

鴨肉の營養率は六、〇であつて、鶏肉の營養率四、四に比すれば、一、六丈け營養率が廣いから滋養分に富んで居る、而して肉味は淡泊にして高尚佳味、俗に鴨の味と迄稱へられて、賞美せらるゝ程にて、鳥肉中第一位の肉味を有して居る。

第一 鴨肉の需用

往古から年頭に鴨の雜糞を食ふことは儀式の一となつて居つて、宮中でも今尙毎年の例として鴨雜糞を廢せられぬやに漏れ承はる、以上の如き關係からか年末の贈答品に多く之れを使用せらる、尙此他鴨肉の

野生眞年鴨減す

需用は頗る大なるも、獵具の進歩は年々野鴨の蕃殖を減退して、野鴨の供給は需用を充すに足らないから、自然飼鴨の肉の需用を喚起したのである。

第二 鴨肉料理

鴨肉は牛肉鶏肉等と等しく鴨鍋として食するを初めとして、日本料理の茶碗、甘煮、焼鳥等に使用し、又西洋料理支那料理等の材料として多く用ゐられるが、中にも鴨肉を厚き鐵板の鍋で焼いて食ふは頗る美味にして高尚の風味あり、雜鴨のカツレツ又は支那料理は、食道樂者の最も歓迎する所なり、尙罐詰に製し鴨味噌等にすれば最も妙である。

第二節 鴨 卵

中雞の肉は頗る歓迎する

蛋黃濃
黄にし
て大な
り營養
率は六
〇

卵殼の
色澤を
變ずる
蛋黃を
濃黄に
ひする
方法

鴨卵は卵色々澤共に鶏卵と少しも相違なきのみならず、却つて蛋黃の如きは上海卵又は名古屋コーチン、ダルマ等の卵よりも、氣持ちの好い程濃黄であるから、料理製菓用などには最も適當して居る、それに鶯の如く泥臭なく、滋味に富めるを以て之れ亦た需用が頗る多い。

第一 卵殼及蛋黃の變色

鴨に依ると卵殼の白灰色を帯びたる卵を産するものがある、之れは進化の世代若きものにて全く固定せざる鴨に多きものである、之れを變色せしむるには世代の古きものと配偶し世代を重ねるを可とす、世代を経れば従つて赤味を帯べる白色の卵殼に變じ来る、又蛋黃の淡きものあるは餌料の關係するものなれば下の如き餌料を給すれば、漸次濃黄色に變じ来るものである、一、青物を多量に給すること、二、青

物は濃緑なるもの最もよし、三、粟玉蜀黍小麦大麥等を給すること、
 四、生にて與へる餌料は煮たる餌料よりも濃黄ならしむるに効力ある
 こと、五、蚯蚓、蠶蛹、田螺等の動物餌料を適宜に與へて運動せしむ
 ること等なり、之れに注意すれば蛋黄を濃黄ならしむ。

第二 鴨卵の貯藏法

鴨卵を永く貯藏するには、一、少許の酒石酸と食鹽とを混じた石灰乳
 中に卵を浸して乾かし置くこと、一、石灰水を新に作り大なる瓶に充た
 して、其中に卵を入れ浸し置くは最も永く貯藏し得るなり、一、卵を
 水ガラス硫酸水曹達に浸すこと、一、卵殻の外面にバラピン、アラビ
 ヤゴム、ヘットなどを塗り木灰中に埋め置くこと、一、サルチル酸液
 に浸し置くこと等は最も輕便なる貯藏法である。

簡易貯
藏法

第十章 鴨利用の途

一般に鴨を飼養するのは採卵食肉愛玩用が主なる目的であるが、鴨は
 此以外に頗る有益なる利用法がある、養鴨者の参考として今之れを項
 を逐ふて略述しよう。

第一節 飼 用

鴨を飼に利用して野生の眞鴨を初め小鴨、黒鴨、緋鴨等の狩獵を爲す
 のである、其狩獵法は千差萬別種々あるも、宮内省御獵場の御鴨獵を
 初め、其他民間に於て普通一般に行はれつゝある獵法は引堀、飛び掛
 け、繫ぎ置き等なるが其重なるもの、二三に就て説明しよう。

第一 引堀用囿

沼池の周圍に幾條も引堀を穿ち其引堀の奥に餌料を撒置き、囿鴨を數十羽放飼して野生鴨を其引堀に誘致せしめて、入口を閉塞する音に野生鴨の驚き飛去らんとする所を、其周圍に手網を用意して待ち伏せ、夫れを掬ひ捕へる方法である、之れは頗る愉快な狩獵法で、此獵法には囿鴨が最も必要なるものである。

第二 繋ぎ置用囿

此獵法は囿鴨の片脚に六七尺の糸を結び付けて、天然の沼池に繋ぎ置いて、野生鴨を導き餌料を給して飼付け、引き冠ぶせ、同無双網等の装置を爲し置き、物蔭に潛み居りて野鴨の網に來れるとき網綱を引き締

め、引冠せて捕獲するのである。

第三 飛び掛け用囿

此獵法は水田又は池沼等の附近へ小屋を作り其處に潛みて、天空を翔ける野鴨を見るや、囿鴨二三羽飛ばしめて野鴨を其水田沼池へ誘ひ降さしめて、小屋の窓より銃撃する獵法であるが是れに使用する鴨は羽力を強く養成することが肝要である。

第二節 農家に於ける利用法

養鴨業は農家の副業として最も有利なる上に、桑園果實園などの害虫を捕食せしめ、又は水田に飼養して害虫驅除の用を爲さしむる等頗る有益なる利用の途が多々ある、其概略を説明せん。

一舉兩得の策

第一 畑地の除草

鴨を葡萄柿桃梨林檎等の果實園又は茶園桑園等へ放飼すれば、不熟の果實が落ちて腐敗するもの及び昆蟲雜草等を捕食するを以て、殆んど給餌の要はない位である、加之廣い大な蹠のある脚で雜草の上を踏み躪るから、雜草は遂に芽を吹く事なく枯死し繁茂を防ぐ効を爲す、夫れに排泄する糞尿は其雜草及び落ち葉と混じて堆肥様になつて作物の肥料となる、又害蟲の如きも捕食することが巧であるから頗る有益の用を爲すものである。

第二 稻田追ひ

鴨を稻田に放飼すれば喜んで泳ぎ廻りて求食するものなれば、其蹠で

人手を省き換土除害蟲を爲す

稻株の間を搔き廻る爲め換土除草の用を爲て人手を省くのみならず、稻の害蟲を捕食するを以て害蟲の驅除となりて、極めて有効なる上に鴨には餌料の給與を要せざれば一舉兩得の利用法である、之れを爲すに小僧又は婦人が一本の竹竿を以て之れを指揮すれば、次から次へと漁食しつゝ、移り轉じて人以上の除草換土の役を爲すものなり、鴨は馴飼すれば飼養者の指揮に従ひ意のまゝに集散を爲す者であるから、此土田追ひには頗る適當なるものなり、尙秋季に至り收穫後の田へ放飼すれば、落穂其他の昆蟲等を漁食するを以て之れ亦た更に給餌の必要がない、加之排泄物は腐敗して翌年の肥料となる、極めて有利の用法なりとす、土田追ひには成鳥は勿論生後四五十日の雛を適當とす。

第三 用水保護

農家の水田に引く灌漑用の溜水池又は溝等へ常に放飼すれば、水草雜魚其他昆蟲を捕食し餌料を要せず、其上水草及び周圍の雜草の根を漁食するから、周圍に繁茂して漸次池を狭ばめ行くを防ぐ爲め、挿苗の期に至りて池の浚渫を爲す要なきに至りて、頗る用水の保護を爲すものである。

第四 廢物利用の飼養

鴨は比較的粗食に堪へるものなれば、廢物を利用して飼養するに最も適當である、即ち兵營監獄病院工場などの炊事場附近に飼養して、殘飯其他の洗ひ流などを給與すれば頗る好良の成績を見る可く、又下宿宿屋料理等の殘物にて飼養するも亦有益なるのみならず、一方には庭園庭池などに美觀を添ふるなり、此他養魚場製糸工場養蠶所精米場等

有利の飼養法

にて生ずる遺粒、魚屑、蛹、屑蠶等を利用して飼養するも亦最も妙なり、尙小學校等にて之を飼養し、其總監督を教員小使等が爲し、生徒の餘暇に自然飼料たる動植物を蒐集せしめて、一人幾羽受持と云ふ様に規則正しく之を行へば、一方に於ては教育上にも幾分かの好教訓を與へ、一方に於ては養鴨上よりの生産物を以て學校及び生徒に分割して貯蓄し、又は修學旅行運動會等の費用杯に充つるは最も有益の業とす。

第十一章 養鴨業の成否

養鴨業の成否は一に其飼養管理法の如何に繋るものとのみ思ふ人あらば、开は誤解の甚だしきものと云はねばならぬ、何んとなれば養鴨業は一時に奇利を占て、一躍成功者の列に加はらうと云ふ様な投機的事業でなく、確固たる立派な一個の實業であるからである、機に投して

投機的
事業に
非らず

成否を
決定す
るメ
ール

奇利を占める一時的の事業でないから、決して不用意に着手す可きものではない、多少之れに關する技倆と知識とを要するのである、故に如何に資本が豊富であるからと云ふても最初から大袈裟な設備を爲して着手す可きものではない、養鴨業の成否を決定するメートルは主に此處に存するのである、即ち養鴨の要義を誤解して之れに要する技倆もなく智識も有せずして、突然不用意に着手して奇利を占めやうと投機的山師的考へで營から、半年か一年経ぬ内に養鴨は駄目である損失を招くものであるとするのである、然かるに之れに關する智識も技術も心得て後之れを行へば資本を掛ければ掛ける程、大袈裟に行へば大袈裟に行ふ程利益になつて大成功を來し、却つて實業であるか奇利を占むる底の一時的投機事業か判断の出來ぬ程の收利を見るに至るのである、之れ養鴨業が確固たる立派な實業たるを證するものである、斯

小規模
より始
めよ

く説き來れば養鴨は何人にも容易に出来る簡易なものであると云ふ其特長と矛盾するかの如く思はれるであらう、が、決して矛盾はしないのである、養鴨は何人にも容易に營めるものであるから、最初之れに着手するに當つては僅かな資本で小規模に之れを始め、而して養鴨に要する智識も技倆も修得して後、漸次に資本を増して大規模に之を行へば、極めて容易に且頗る有利であつて、成功の域に達して永久的確固たる事業となるのである、故に養鴨業の成否は一つに其着手する最初の意志に繋がるものであるから、一時一寸の着手にして直ぐ大利益を見ようと云ふ投機的意志では決して成功はしないのである、之れを成功し様と思ふならば永久事業として着手し最初は經驗と智識を得ると云ふ考へ位で始め、漸次に資本を増加し設備も大規模にする様にして行けば成功するものであるから、養鴨業の成否の岐路を能く心得

て着手することが肝要である。

第一節 養鴨者の資格

養鴨者の資格と云ふても、何にも養鴨に關する學問をした修業資格を要すると云ふ意味ではない、資本の程度の資格を云々するのでもない、けれども養鴨業が前述の如き確固たる實業である以上は、之れに従事する人も投機的山師的な人でなく眞個の實業に着手するの意志ある人でなければならぬ、一時的奇利を占めて大成功者の列に加はりたいと云ふ様な考へのない人なれば、婦女子であらうが老人であらうが更に差別する要はない、のみならず養鴨者たる資格は充分である、而して之れを副業として着手しやうと云ふ様な人なれば、尙更有望の養鴨者として迎へることが能きる。

着實な
る人を
要す

第一 漸進主義

養鴨業は如何に資本金が富裕であつても地の利が好適して居ても、最初から大規模の設備を爲して多くの鴨を買入れて之れに着手しても、決して奇利を得るものではない、何故なれば如何鴨が簡易に飼養せられて手敷を要しないと云ふても、半年や一年で充分な飼養管理が修得せられるものではない、又人にのみ教られた許りで完全な飼養が出来るものではないのであるから、必らず自ら飼養しつゝ、鴨其物を研究して鴨の常習やら嗜好やらを充分に呑み込んで、然る上で飼養管理を改良もし工夫もし熟練もして、経験を基礎として成功を永久漸次に期す可きものである、世には養鴨業を始めるからと云ふて一時に百羽二百羽の雛を買入れ、又は種禽を多く購ふて直に目に見える利益を上げ様

基礎を
経験の上
に立

として、反つて三四ヶ月も経過しない内に雛に斃死せられたり、種禽を退化せしめたりして不測の失敗を招く者が往々あるが、是等の失敗者は當然の失敗で敢て怪しむに足らない、斯様な遣り口で養鶩又は養鶏に向つた日には一ヶ月を出でずして大失敗を招くのである、苟くも生物を飼養して夫れから生産を見ようと云ふには、如何なるものを飼養してもさう容易に行くものではない、多少の工夫と改善及熟練等を要するものであるから、基礎を経験の上に立て、行ふやうにしなければならぬ、最初種禽を得て夫れから飼ひ始め自分の手で孵化した雛を育て漸次に蕃殖する主義で、小さな所から始めて次第に手を擴げて行く様に漸進の主義を守らねばならぬのである、即ち養鴨の尋常一年生から大學を卒業するまでは歩一步宛踏んで行けば、遂に卒業の榮譽たる大成功を爲すのである、故に養鴨者は漸進主義の人たるを要するので

ある、併し乍ら養鴨に経験を積んでからは、如何に資本を増加し如何に大規模なる設備を爲して之れを行ふとも、決して之れが成否に關係するものではないのである。

第二 大成の要點

漸進主義に伴ふて必要なる大成の要件がある、と云ふのは鴨は豊肉多産なるものであるとのみ心得てはならぬ、鴨は卵を産むやうに自然に出来たものであつて、早く云へば鴨を卵製造機械と看做しても、此の機械を使用するに其當を得ないならば製造が出来ないのみか機械まで破損するに至るであらう、假令破損せずして製造が出来るとするも其製造力は減退して來るのである、即ち鴨が卵を産む様に出来て居ても之れを産ます可く適當の材料を適度に與へて、自然に産卵を促す様に

周到な
用意を
要す

飼養管理をしなければ、到底満足なる効果を収むることは出来ぬものである、之は養鴨の要義に於て述べた如くであるから、用意して着手すると共に漸進主義で従事し、同時に精密に熱心に微細な點にまでも留意して研究もし工夫も凝らして専心之れが成功に努めねば、如何に漸進主義で従事しても放任しては鴨を生かして飼ふと云ふのみで到底養鴨の基礎が確立するものではない、養鴨業を有利に經營しやうとするには、是等の覺悟がなくては最初から始まらない方が可いのである、現時の養鶏業の退歩するのは、最初着手する時に當つて此覺悟を有せずして着手した爲めで、之れが今日の如き悲境に沈淪するに至つた一原因たることは免かれないのである。

第三 婦女子と少年

婦女子
及少年
の好適業

前述の要領から推しても養鴨業は概して婦人若くは少年などに適當な業務であつて、反つて是等の人々の手で飼養管理を爲せば良好な成績を見ることの出来るのは實驗に因つて證明せられる、何故なれば婦女子は男子よりも事物に緻密で熱心で秩序正しく、殊に小心翼翼萬事に注意が行届き微細な事まで觀察するからである、又少年は己の天真爛漫の精神は動物の無邪氣なる點と相一致して、頗る心長閑に管理もし爲られもするから鴨もよく馴れ親しみ少年も亦衷心から愛護するし、それに少年は授けたことだけは日課の如くに守つて、規則正しく管理を施すものであるからである、夫れに婦女子少年などは殊に動物を取扱ふ上に優しく且綿密に根氣強く熱心であるから、其成績は比較的良好である、故に甚だしく規模の大きくない以上は是等の人々の手に因つて飼養するが適當である、殊に家庭の娛樂半分の養鴨は無論のこと、

副業的に飼養するにも又實利を目的として飼養する准專業的に飼養するにしても、婦女子少年等に管理せしむるは頗る適當して居る、故に養鴨業者として是等の人々は有資格者であると云ふことが出来る。

第二節 土地の利

養鴨を營むには土地の利不利と云ふことが頗る至大の關係を有するものである、土地の利不利は養鴨の成否を決する一つの原因と云ふても可い位である、農家の副業家庭の娛樂として少數の鴨を飼養する上に於ても土地の關係が大にあるものであるから、營利を目的として大規模に養鴨業を専門に營むに當つては、先づ第一に此土地の利不利を究めることが肝要である、去れば養鴨に就ての土地の利不利に關する二三の要點を説明せねばならぬ。

第一 土地適否

土地の適否と云ふ問題に就ては、單に如何なる地質の土地が養鴨に適合して居るかと云ふ丈けなれば、如何なる土地にも地質にも養鴨は適當して居ると答へ得られるのである、養鴨に土地の適否など云ふことは深く研究を要す可き問題でないのである、何んとなれば事實上鴨が棲息に適しないと云ふ程の土地は殆んどないからである、實地に臨んで既に斯の如くである以上如何なる土地にでも養鴨は出来るから、土地の適否を撰擇すると云ふが如きは全く不必要な價值なき問題たり、然れども翻つて養鴨業の全體の上から觀察すると土地の適否は大に研究しなければならぬ問題である、水利の便なき土地で爲すよりも水利の便がある土地が適當し、熱寒兩帶よりも中温の土地が適當である、

適當な土地

副業的に飼養するにも又實利を目的として飼養する准專業的に飼養するにしても、婦女子少年等に管理せしむるは頗る適當して居る、故に養鴨業者としては是等の人々は有資格者であると云ふことが出来る。

第二節 土地の利

養鴨を営むには土地の利不利と云ふことが頗る至大の關係を有するものである、土地の利不利は養鴨の成否を決する一つの原因と云ふても可い位である、農家の副業家庭の娯樂として小數の鴨を飼養する上に於ても土地の關係が大にあるものであるから、營利を目的として大規模に養鴨業を専門に營むに當つては、先づ第一に此土地の利不利を究めることが肝要である、去れば養鴨に就ての土地の利不利に關する二三の要點を説明せねばならぬ。

第一 土地適否

土地の適否と云ふ問題に就ては、單に如何なる地質の土地が養鴨に適合して居るかといふだけならば、如何なる土地にも地質にも養鴨は適當して居ると答へ得られるのである、養鴨に土地の適否など云ふことは深く研究を要す可き問題でないのである、何んとなれば事實上鴨が棲息に適しないと云ふ程の土地は殆んどないからである、實地に臨んで既に斯の如くである以上如何なる土地にでも養鴨は出来るから、土地の適否を撰擇すると云ふが如きは全く不必要な價值なき問題たり、然れども翻つて養鴨業の全體の上から觀察すると土地の適否は大に研究しなければならぬ問題である、水利の便なき土地で爲すよりも水利の便がある土地が適當し、熱寒兩帶よりも中温の土地が適當である、

適當なる土地

交通不便の土地よりも交通の便利なる土地が適當で、地代を拂ふ土地よりも地代の出ない沼池荒地などが適當して居ると云ふ風に、畜に鴨を飼養すると云ふのみの見地から云ふのでなく、養鴨業の大體より見て、之れを充分の效果あり利益有らしむると云ふ點から云ふと、經濟的にも便宜的にも此土地の適否と云ふことは大に究めねばならぬことである、之れを要するに成る可く經濟で便宜で飼養管理の容易な土地が適當であると云はねばならぬ、然れば是等の要點に應じた土地を撰擇することが肝要である。

第二 需給と地利の關係

養鴨業の生産物の需用供給は地利の得失に大なる關係を有して居るのであるから、養鴨業を爲すに當つては生産物の需給と地利の得失と

交通の便よきを
地を撰
定せよ

需用都市の
附近が適當

が密接に關聯せることを心得て、地地利を採ることに注意しなければならぬのである、如何に多くの生産物を得如何に優良な成績を擧げる養鴨を營んで居ても、其生産物を需用地へ供給するに不便で多くの費用を要する地地利の悪い所であつたならば、養鴨は有利であつても之れに因つて實利を收め得ることが出来ないものである、即ち之れは地地利を得ざるより來す所の必然の結果であるから、地利の得失は養鴨業に着手するに當つて大に究めざる可からざる重要問題である、故に實利を收めやうとする營利的養鴨業を營むには、深く此地の利の得失を考察して、其附近に需用の大なる都市を控へて居るか、若くは需用地へ運ぶに交通機關が充分でそれに托して引合ふ所でなくてはならぬ、是等地の利の得失を考へず無暗に經營の歩を進めて、大規模の養鴨業を開始しても豫期の實利は見られないのである、故に此地の利の得失

を考察して、有利の上にも有利に之れを行ふ計畫を爲さねばならぬのである。

第三節 資本の運用法

何に事業に着手するにも多少の資本を要するものであると同様に、養鴨業を始めるにも多少の資本を要することは他の事業と更に變つたこととはない、けれども幾何の資本を要するかと云ふことは餘りに漠然とした問題で、經營者の手腕と經營法とに依つて相違があるものであるから、今茲に幾何の資本を以て之れを開始するのが適當であるとは明言し兼ねるが、元來養鴨業は設備費用に資本を多く要しないから、比較的少資本を以て經營が出来るのであつて、極めて着手し易い事業であること云ふことは確言して憚からぬ。

資金の多寡は一經營者の手腕と經營法とに依りて異なる

運用の巧拙あり

元來事業の成否は多く資本の多寡に依るものでなく、其運用の巧拙が與つて力を致すものであるから、運用を一步誤れば如何なる多額の資本を投じてても、決して其資本額に對する充分な利益を見ることは出來ない、故に養鴨業を營むには何程の資本を以て適當とするかと云ふ問題よりも、之れだけの資本を以て之れを開始するには、如何に之れを運用す可きが適當であるかと云ふ事が肝心の問題であらうと思ふ、茲には或る一定の職業を有して居る人が副業として養鴨業を營むに、或る一定の資本を如何に運用すれば其投資額は、副業に適す可き生産を爲すものであるかと云ふ、一般的の資本運用法を説述して参考の資料に供せん、去れば資本金額三十圓、六十圓、百圓の三種の運用法に就て略述しよう。

第一 資金三十圓の運用法

先づ最少額の三十圓の資金を以て養鴨業に着手する場合は、如何に此資金を運用すれば適當であるかと云ふことを説くこととする、此場合は内五圓を鳴舎其他附屬品の設備用として、残額二十五圓で優秀種鴨一雄七雌を買入れるが適當である、此七雌からして春二月若くは三月四月頃には多数の雛を孵化することが出来るから、其内から優良な若雛を十雄四十雌だけ撰り抜き、他の雛は全部賣拂へば其賣上げ金でそれまでの餌料其他の費用は補ふことが出来る、而して一方には五十羽の雛を飼育する、一方では雌七羽が相變らず産卵するから其卵の賣上げで五十羽の雛と、八羽の親鴨の餌料其他の費用を補ひ得て剩る位である、斯くして秋季に及べば四十羽の雌雛が發育して産卵し始める、

一雄七雌より増殖す

翌年の春尙七羽の雌から雛を孵化することとして、四十羽の若親雌は採卵一方とすれば、此年からは收利を見ることが出来る、且つ鳥は殖え経験は積むし其基礎は安固となるので、自然失敗の憂ひも少なくなつて立派な養鴨業は成立して来るのである。

第二 資金六十圓の運用法

最少額の資金の三十圓の場合是最も小規模の養鴨業に過ぎないが、之れを倍加して六十圓の資金を投することとなれば、稍々見る可き經營が出来るのである、此場合は資本の倍加に伴れて第一の場合と同じ一雄七雌の種鴨を二群飼養する方が安全の策であるから、結局三十圓の資金を二つ運用すると云ふ積りで着手するのである、けれども二組乍ら三十圓の資金の場合の如き経路を辿つては餘りに單調過ぎる

二雄四雌より増殖す

から、一群は前述の通りにして飼養して收支を償ひつゝ、残る一群からの産卵は、六月頃まで引續き雛を孵化して其内から優良な雛五十羽を採卵用に残して、他は屠肉用に市場へ賣出す計畫で肥盈する様に飼育するのである、而して二群から得た百羽の採卵用雛は其年の初秋からは産卵し始ると同時に、屠肉用の若干の雛は大に發育して來るから、年末近くの相場の高いときを見計らつて賣り出す、之れから孵化費用や育雛餌料を差引いても年末には尙多少の利益を見ることが出来る、斯くて其翌年からは百羽の雛即ち八十雌から生産する卵は全部賣却することゝして、親鴨十四雌から再び雛を孵化せしむることゝして、例に依つて此内から適度に採卵用雛を残して、其他は幼雛の内にも賣り又適度の屠肉用雛をも育て、年末には其雛諸共に種鴨の三雄十四雌も賣却し、尙産卵用の百羽の若親の内から種鴨用二雄十四雌を残して、

剩り八十四羽も共に屠肉用に賣れば三十圓の場合に比し資本も倍加で種鴨も倍加に過ぎないけれども、二年目の収入は優に三倍以上を得られるのである、斯うなると最早副業とのみ云はず本業とする價値は充分あるのである。

第三 資金百圓の運用法

養鴨業は斯の如く漸進主義を採つて何所までも其方針を守つて實行して行けば百圓以上の資本を投ずる必要はない位である、最早百圓の資金を投じて漸進主義で經營する場合には、充分新機軸を出して營み得られるのである、百圓を投じる場合は鴨舎に四十圓を掛けて三種の設備をするのである、夫れは一は採卵用、二は屠殺用、三は種禽用と云ふ風にして、五十圓で種鴨は矢張り一雄七雌と二雄十四雌の中雛と別

採卵用
肉種以外
の種禽
を供給
をなす

に十圓で一雄一雌の最優良の種禽を買入れて、之れを第二の場合の如く經營しつゝ、一方には最優良の種鴨より生産する種卵を賣り、且つ雛を孵化して種鴨の需用にも供給することゝすれば、大分經營の趣きを變へて營利の一方に一種の趣味を覺えて頗る完全した養鴨業となつて、養鴨の大成を期することが出来る。

右に説くよりも尙以上の工夫と方法とを講ずれば、尙より以上の生産を得る事も出来るのである、けれども資本金の多寡は利益の有無に關係するものでないことだけは承知して貰ひたい。

第十二章 病害の豫防法

鴨は鷄鶩鳩など、異り比較的頗る強健無病のものではあるが、時に依り氣候に依り其他食物及び風土等の關係から病氣に罹らぬとも限らな

病毒は清潔に消毒換氣法に在り

屠殺を要す

いから、常に病害の發生せぬ様鴨舎の清潔法、換氣法、消毒法等に注意して、之れを未發に防ぐことが肝要である、若し鴨が食欲進まず不活發倦怠の状態を示したる場合は、直に診察して其結果他の鴨と離隔して靜かに飼養することが肝要である、而して餘りに病勢が重態なれば、惜まず速に撲殺し他鴨に傳染せぬやうしなげねばならぬ、而して病狀及徴候は却々素人に明確に知れるものでないから、藥治療法は頗る困難であつて専門家ですら往々誤ることがあるから、治療の結果とても決して満足す可きものではない、故に病鳥と見れば、可成速に撲殺する様にして、平常の豫防手當等を嚴重にした方が得策である、茲には病害の豫防法として鴨の診察法と其手當の一斑として藥物の効用丈け述べて置くから、其他は専門家に俟つに非らざれば素人治療法は却つて鴨を害ふ基であるから、寧ろ述べない方が増しであらう。

第一節 鴨體診察

鴨體の診察は矢張り人間に行ふと等しく、脈搏、呼吸、體温等に就て検査するのであるが、之れより以前に平常から注意すべき診察法とも云ふ可きは、朝夕の出入給餌の場合などに鴨の状態に異状なきや否やと云ふを、外觀上に於て注意して見出すことを要するのである、若し群中に状態を異にする鴨が居ることに気が付けば、直に捕へてそれを診察するのである、而して若し病氣に罹り居ることが分れば相當の手当を施さねばならぬ、故に此外觀上に於ける鴨の状態に異變なきやを見出すことは最も肝要のことである。

第一 外觀の検査

注意の要點

常に鴨の外觀上に於て検査するには如何なる點に注意すべきかと云ふに、第一營養は充分であるか、第二眼目に異状なきか、第三鼻孔に異状なきか又は鼻汁を出しはせぬか、第四羽毛の色澤に變りはなきか、第五多く嚙嚢に溜食しては居らぬか、第六食欲に變りなきか、第七糞尿に異状なきか、第八産卵状態に異状なきか等に注意し、尙且倦怠不活潑の模様なきかに氣を附けることが肝要である、若し是等の諸點の中一點でも異状があれば能く診察的検査を行ふて、其結果病鳥の手當を施さねばならぬ。

第二 診察的検査

鴨群中に於て前項の外觀上に異状ある鴨を見出したる場合には、尙ほ進んで身體に就て診察的検査を施すのである、即ち脈搏、呼吸體温等

體溫
脈搏
呼吸
數

に就て緻密な診察を行はねばならぬ、體溫の検査は檢溫器を直腸内若くは翼の下に四分乃至五分時間挿入して置くのである、而して鴨の體溫は大小老幼によりても外界の寒暖に依りても多少異なるものであるが、普通攝氏の四十一度六分より四十二度二分位である、之れを鴨體の平溫と見て可いのである、脈數は一分時間に百十を以て普通とするのである、而して健全な鴨を興奮せしめたる時は、每一分時に二百五十の心搏動を爲すものである、呼吸數は健康體で一分時間に四十五回乃至四十八回のものとするのが普通である、此標準に於て診察を行ひ、其異狀に因て疑ひある鴨を出したるときは、他の鴨と離隔して日に三回位診察を行ひ、且つ充分なる手當を施さねばならぬ。

第二節 藥物の効用

外觀的検査及び診察的検査に於て、病鴨と認めるものを出したる場合は、其何病たるか何にが原因であるかを能く推究して、之れに適應した藥物の効能を見て、手當を施さねばならぬ、左に項を分けて藥物の効用を列舉し養鴨家の便に資せん。

第一 傳染病

虎列拉病 徴候は倦怠沈鬱し歩行困難を覺え、兩翼を垂下し首を垂れ食慾を減ず、初期は下痢を催し白色乳様の粘液を排出す、病勢進めば黄色となり後には暗綠色を呈するに至る、呼吸困難の狀となり眼瞼閉塞し眠りし如くにして身を慄はす、原因はバチルス作用にて氣候の陰濕換氣の不充分なる等より生じ重に梅雨時に發生す、藥物は蕃椒末二、樟腦末一、大黃根末三、阿片末四、之れを混和してアラビヤ護

誤にて丸劑二十粒となし、毎回一粒を内服せしむるか、又は大黃丁幾四、樟腦精一〇、阿片丁幾二十滴を混和して一匙の水に六七滴混和して内服せしむるのである。

炭疽病 徴候は皮膚及び口窩に帶青赤色の腫瘍、若くは暗赤色の斑點を生じ結膜腫を起し、患部は速に壞疔に陥り兩翼を垂れ食欲を止み歩行困難の状態に陥る、石炭酸を飲水に混じて服用せしめ、又は蕃椒、生姜甘草末、炭酸鐵、砂糖等を混じたものを一日數回内服せしむ。

結核 徴候は羽毛の色澤を失ひ食欲を減じ、呼吸困難となり咳嗽を發す、一旦此病に罹りたるものは清潔にして空氣の流通良き溫暖なる所に靜養せしめ、良好なる餌料を給與し置くの外手當なし、重患は撲す殺るを要す。

デブテリア 徴候は其舉措不活潑となり、呼吸は連迫し羽毛の色澤を

失ひて頗る柔順となる、千倍乃至二千倍の昇汞水、皓礬水、又は石炭酸及び硝酸銀を患部に塗抹し、規那鐵とブランダールを服用せしめ、又は胡桃葉煎一〇〇〇、グリスリン二〇、鹽酸加里留謨五、撒里迭兒酸〇、五強、酒精一五、〇を調劑して毎日一二回一匙を内服せしむるを可とす。

赤痢病 徴候食欲を減じ渴して飲水を爲す、初期には多量の糞便を爲し遂には下痢を催し、粘膜血液を交ぜたる糞便を爲す、重病に至れば魚腸に似たる粘稠物を混じ排泄するに至り歩行困難となる、阿片丁幾亞麻仁油を混和して頓服せしめ、又石炭酸四五滴を水に混和して一日數回に分服せしむ。

第二 消化器病

生羽不良 酒中に浸せるパン又は肉を與へ、其他營養に富む餌料を給して溫暖の場所へ静養せしむ。
 換羽不良 少量の蕃椒又は胡椒を餌料中に混じ與へ、又は飲料水に硫酸鐵を加へて啜らすを可とす。

第六 消毒劑

鴨舎内及敷物等の消毒劑としては、千倍の昇汞水、石炭酸、フォル、マリ、石灰汁等を用ゆるを効多しとす。

第七 諸藥物の効用

大黃根は多量に用ふれば下劑となり、少量なれば健胃藥として食慾を増し、便通を緩和ならしむ。

姜薑 蕃椒 胡椒 桂皮 姜薑 胡椒 桂皮は健胃劑として胃病に効多し、蕃椒は少量を用ふれば健胃刺動藥として効あり。
 攝綿施那 サントニイネ 絛蟲蛔蟲殺下藥なり。
 亞麻仁油 下劑として効多し。
 サルチル酸 防腐と醗酵を押へる効あり、又驅熱藥となる、効用石炭酸と同じく、感冒、リウマチス等に効あり。
 テレピン油 利尿祛痰腸管の蠕動を催進し、絛蟲を驅除する効を有す、砂糖と糖蜜 砂糖は脾液の分泌を促し、胃の動機を活潑にし、緩下藥なり、糖蜜は咽喉加答兒に効多し。
 ヒマシ油 緩和良藥として灌腸に用ふ。
 澱粉 挫骨の繃帶として可なり、又粉劑として濕疹皮膚病に良く、熱病にも効あり、又溶液は腸管の炎衝カータル等にも有効なり。

拔爾撒謨 創傷塗布用藥とす。
 肝油 強壯劑として効あり。
 甘硝石精 興奮劑としての用藥とす。
 稀鹽酸 清涼健胃として用ふ。

實用養鴨法畢

明治四十三年十二月五日印刷
 明治四十年一月十三日發行

〔實用養鴨法〕
 定價金四拾八錢

著作
 所有

著者 椋木市世
 發行者 大橋新太郎
 印刷者 水谷景長
 印刷所 博文館印刷所
東京市日本橋區本町三丁目八番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所

東京市日本橋區本町三丁目

博

文館

振替貯金口座東京二四〇番
 販賣部電話本局二六二〇番

●實驗通俗產業叢書

各册菊判 ●發行所 博文館
紙數及 定價不同
東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番

(11)

前香川縣琴平工業學校長 一月清方君著

第壹編 ●麥稈眞田製造法

正價廿五錢 郵稅六錢

次 目
麥稈眞田の現況（眞田は如何なるもので、眞田の輸出、眞田製造業の有様）
麥稈眞田の設計（眞田製造の分業、製造器械、製造に關する收支一斑）
麥稈眞田の技術（眞田に關する農事、原料下拵及び仕立方、眞田の組方）

農藝化學士 柿崎鈿太郎君著

第貳編 ●堆肥製造施用法

正價拾錢 郵稅六錢

次 目
○總論
○堆肥とは何ぞや
○堆肥製造に用ゆる材料
○場所の建設法
○製造法
○種類
○特性
○取扱法
○施用法
○効能
○堆肥と各種土壤の關係
○肥料の關係
○作物の關係
○害蟲の關係
○土地は改良せざるべからず
○結論

青年農會報記者 和田歌吉君著

第參編 ●果物利用法

正價參拾錢 郵稅六錢

次 目
果物と關係及性質、効用、種類
○仁果類
○核果類
○漿果類
○漿果類
○酸果類
○酸果類
○母母
○葡萄酒
○果酒
○果物の調理及び罐詰
○果物の選擇
○罐詰用の果物
○同製造
○調理用の果物
○果物の調理
○ナイー用の果物
○果汁の罐詰
○乾柿の製造
○外四項

米國農學士 森山家三郎君 志成耕岳君 共著

第四編 ●畜產物利用法

正價參拾錢 郵稅六錢

次 目
緒論
○肉類の製造法
○屠畜の検査法
○家畜の屠殺
○解體法
○屠肉検査法
○燻肉の製法
○腸腸の製法
○醃漬法及び腸詰の製法
○肉エキスの製法
○罐詰の製造法
○牛乳とバター
○畜產廢物利用法
○販賣肥料の製造法
○附録重要事項

工學士 田中宗一郎君著

第五編 ●炭燒法と副産物

正價廿五錢 郵稅六錢

次 目
總論（往時の炭燒法、近世の製炭法）、
○乾留裝置（レトルト）冷却器
○受器及び容器
○廢液の處理
○醃酸製造法
○木精製造法
○アセトン製造法
○木タール
○應用成分
○レナソートの製造法
○成分製造法
○木瓦斯（三項）
○醋酸化合物十四項
○插畫二十九圖

東京美術學校教授 石井吉次郎君 元琴平工業學校長 一月清方君 著

第六編 ●實用漆工術

正價四拾錢 郵稅六錢

次 目
○漆工總論（漆工の沿革要領、漆工の解釋、漆液の原料的性質、漆の乾燥法）
○漆漆法（研究範圍、材料及び術語、主用工具、製作法）
○蒔繪法（研究範圍、材料及び術語、主用工具、製作法）
○附言 漆器の輸出額と海外諸國

農商務省農事試驗場技術農學士 山下脇人君編

第七編 ●乳用山羊の飼養

正價廿八錢 郵稅四錢

次 目
山羊飼養の必要
○山羊は結核菌に侵はること稀なり
○山羊携帶旅行
○瑞西國に於ける山羊飼養の實況
○山羊乳の特徵
○同化學的成分
○同芳香と惡種
○同生産量
○同泌乳期
○同搾乳法
○同乾酪
○同乳脂
○氣候及土質
○畜舎
○圍欄
○飼料
○飲水
○養種
○蹄に對する注意
○其他特性繁殖種類等數十頁

新潟縣三條染織講習所 長津愛染君著

第八編 ●實用捺染法

正價六拾錢 小包料八錢

次 目
○捺染法詳論
○捺染用の器物
○捺染機械大意
○捺染用糊料
○綿布捺染法
○毛布捺染法
○絹布捺染法
○交織布捺染法
○以上を更に便宜の詳解目録百項に分つ
東京朝日新聞記者 著者は新潟縣三條染織講習所の教師にして斯道には深き學殖と經驗とを有せる人なれば斯業に従事するもの爲めには好參考となるべし

工學士 田中宗一郎君著

第九編 ●食料品保存法

正價七拾錢 小包八錢

本書の目的は食料品保存法に於ける實地應用の一助たらしむるにあり、保存法の簡易なる理論を脱して其知識に乏しき當業者に其概念を知らしむるにあり、一般家庭の食卓に季節以外の食料品を供へしむるにあり、されば本書は是等の點に向つて多大の注意を拂へると共に最新の學理と實地の經驗とによりて詳細に之れを總説するに努めたり、苟も食料品を其天然の性状を失する事と防礙せんと欲す人は必ず本書を讀まざるべからず

(11)

農學士 日下部準太郎君 共著

第十編 ● 養蠶改良蠶室法

正價四拾錢 郵稅六錢

中央新聞評 著者各地に養蠶の教師たる數回深く養蠶豐凶の蠶室にあるを實驗し學理と實驗を結ぶる蠶業經濟を緯として記述せるもの即ち本書にして是れを八章に分ち蠶室建築法、蠶室治療法、蠶室取扱法等を詳論したれば養蠶家には必讀の書なる可し

奈良縣立農林學校教諭 農林學士 安藤時雄君著

第十一編 ● 竹林保護繁殖法

正價四拾錢 郵稅六錢

東京日々新聞評 竹材の用途大にして一は國產となり、一は風致を添ゆること人皆之れを知れり、然れども栽培を努めて國利を興す人は至て少し願ふに右は主唱者の乏しき所以ならんか本書は是等の點を説くこと詳密にして世人を啓發せしむるに足れり、余は喜んで紹介の勞を取ると同時に看者が本書を利用して竹林の培養を勤めんことを望む

蠶業專攻 高見竹次郎君著

第十二編 ● 夏秋蠶飼育法

正價參拾錢 郵稅六錢

本書は夏秋蠶の起原沿革より説き起し夏秋蠶の利害得失に及び進んで其種類に就て説き更に進んで飼育法を詳説し猶ほ「飼育標準表」、「夏秋蠶と風穴」、「風穴の構造と貯種法」の三章をも設けて之れが説明を試みれば一般蠶業家の真顧問と謂ふべし

農商務省月寒農學士 岩波六郎君著

第十三編 ● 牧場の經營

正價四十八錢 郵稅六錢

目次 總論 ○ 牧場の撰定 ○ 牧場の地積の決定 ○ 營造物(厩舎、牛舎、羊舎、豚舎、サイロ、玉蜀黍貯藏庫、飼料調製舎、製乳所、蹄切機、木柵道路排水) ○ 器具器械 ○ 飼養家畜の撰擇(馬種、牛種、羊種、豚種) ○ 飼料 ○ 飼料の栽培及生産肥料の計算 ○ 管理者及勞力 ○ 畜産物

農學士 鈴木敬策君著

第十四編 ● 牛乳と乳製品の研究

正價四拾五錢 郵稅六錢

飲料となりたる牛乳の起原より説き始め牛乳製品の研究を學術的に詳説したるもの凡て牛乳に關する知識は收めて一書に在り苟も衛生を重んずる人又は著者研究の迹を窺はんとする人は必ず本書を備へざるべからず

農學博士 横井時敏君校閱 農學士 谷口勝之助君 逢坂重助君共著

第十五編 ● 害虫驅除法

正價四拾五錢 郵稅六錢

目次 總論 ○ 昆蟲(卵、幼蟲、蛹、成蟲) ○ 害虫及益蟲 ○ 害虫豫防 ○ 驅除の必要 ○ 驅除豫防法 ○ 豫防と昆蟲學研究の必要 ○ 同驅除豫防の方法(自然的、耕作的、器械的、藥劑的)各論(不殺類、蔬菜類、荳菰類、果樹、特種作物其他害虫驅除豫防法)

奈良縣立農林學校教諭 農林學士 安藤時雄君著

第十六編 ● 造林の經營

正價六拾五錢 郵稅六錢

時事新報評 造林經營に關する總論より造林準備、各種森林の經營、苗圃の設定と作業、施肥上の注意、苗木の區別植栽、植栽後の手入れ、雪との關係、造林費支出五ヶ年計畫、杉檜模範林の施業法の十一種に分章して造林の經營を懇切に解説し尙ほ植林社、林業經營の方法及成績と清園に於ける獨逸人の造林經營を參考として附載し

京都府技師 山崎嘉夫君著

第十七編 ● 竹材工藝

正價金七拾五錢 郵稅八錢

總論に於ては竹の異名種類分布採集法工藝的性質及び利用上の程度等を説き各論に於ては竹紙の製法竹杖竹籠竹行李籠籠篋家具茶器扇子提灯和傘其他數十種の竹材製品製法より主産地及び輸出品況迄詳細に詳説し尙ほ附録として竹商組合規定を添へ更に巻頭に竹材製品に關する精巧無比なる寫眞版十數頁を掲ぐ竹材工藝品の需要累年増加せる今日此書の如きは當業者を裨益する事頗る大なるものあるべし

椋木市世君著

第十八編 ● 實用養鴨法

正價金四拾八錢 郵稅六錢

國運の隆昌は武力と富力の結合より來る富力乏しき國は一時武力に依りて榮ふと雖も到底永きを保すべからず今や我國は日露戰勝の結果皇威八紘に輝き宇内強國の班に列するも願みて富力の如何を思へば無然たらざるべからざるものあり富力の強大を圖るは我國の下の急務に屬せり富力の強大を圖らんと欲せば、須らく産業の發達隆興に依たざるべからず、是れ本館並に産業叢書なる題目の下に、何人にも了解し易き行文を以て農工業の全貌に亘り學理を經とし、實地を緯とし、具體的に主産及副業を説き、或は技術の秘訣を傳ひ、或は製造販賣の法を叙し、専ら産業家の實際的指導たるの書籍を刊する所以なり、庶幾は之に依りて我國産業隆興の發展に資し、強大なる富力を致すを得ん乎。

農學士 横山春平君著 (再版)

●發行所 博文館

最新 實驗養鶏法

全一冊

洋裝菊判總クローズ
挿木版圖數十個
正金八拾錢
小包料金八錢

本書の眞價!!!

東京朝日新聞は本書を評して曰く

諸物價の暴騰暴騰して生活難の叫び日々高きに當り地方農家が案外恐嘆の聲を放たぬのは寧ろ不思議中の不思議であるが畢竟此れ副業の遍れく行はれたる結果であらう副業にも種々あるが養鶏は最も手近くて利益多き副業である養鶏の書は此迄出版せられたるもの澤山あるが此書は最も詳しく最も適れき注意を拂はれたる實踐養鶏の好参考書であらうと信ずると以て本書の眞價を知るべく以て本書の好評を博せる所以を知るべし

農學士 月田藤三郎君著

先づ内容を見よ

家禽學

三版

全一冊洋裝大判紙數三百十六頁
並製正價金四拾錢
特製金五拾五錢

養鶏の來歴。鶏卵。卵の孵化。雛の飼育(鶏飼上の要件。早春雛の飼育。失熱の候育雛の困難等) 鶏體生理。鶏の飼養(飼料の分量を定むる要件。食鹽の作川外十九目) 鶏舎。鶏の管理。養鶏層。遺傳淘汰及交配。鶏の種類。鶏の鑑識法。鷓鴣及鷓鴣。パクテリヤ。家禽病。手術

農學士 高見長恒君著

●發行所 博文館

畜産汎論

八版

全一冊菊判三百二十頁
並製 正價金四拾錢
郵税金八錢
特製 正價金五拾五錢
小包金八錢

第一編 畜産汎論

○總論○家畜の歴史○家畜の特性及び適性○雌雄相違の形質○家畜の形質の變遷○家畜の飼育の決定○遺傳○種類及び種和○繁殖○畜類の養育及訓練

第二編 家畜飼養

○總論○飼料○家畜飼養法
第三編 家畜利用論
○總論○生産○肉○乳汁○皮膚附生物○力
第四編 酪農論
○乳汁の生成○乳汁の組成○乳汁の生理學的性質○乳汁の分泌に影響する諸般の關係外數章

(容内書本)

畜産各論

(版二十)

並製 正價金四拾錢
郵税金八錢
特製 正價金五拾五錢
郵税金八錢

農學士 山口晋吉君編

(菊判紙數三百五十頁)

(容内)

第一 牛(發育。類別。蕃殖。飼養。管理。畜産) 第二 羊(發育。類別。洗毛及剪毛。蕃殖及飼養) 第三 山羊(種類。蕃殖及管理) 第四 馬(發育。類別。蕃殖及飼養) 第五 驢。第六 豚(發育。類別。蕃殖飼養及管理) 第七 家兔。第八 家禽(鶏。鷓鴣。鴨。吐綴鷓。珠鷓。以上の蕃殖飼養管理。珠鷓。家禽病。外に家禽畜産查第四項)

農業世界記者

鹿野直司君著

發行所博文館

農業界時言

全一冊 洋裝 菊半截
紙數 百六十頁
正金廿五錢
郵税金四錢

本書は地方の振興、貧民の救済、新利源の開發、副業を講じ、農業教育、青年團體の躍起を促し、或は移民、林業、水産の養殖を奨め、或は忌憚なく農政の非減租地價修正學問の弊を痛論し、農界各方面に涉りし三十餘篇を掲げ、農政家、青年會員、農村吏學生、教育家、技師等は必讀すべき著書なり。

園藝業と産業組合

農學士 西垣恒矩君著

全一冊 洋裝 菊判
紙數 百六十四頁
正金四拾錢
郵税金六錢

○園藝業の意義 ○農家の經濟と園藝業 ○園藝業の現在及將來(園藝業の現在と園藝業の將來) ○園藝業の收支計算 ○園藝業に應用せらるる産業組合の種類(蔬菜及花卉を業とする園藝、果物種苗を業とする園藝、結露) ○實例(北米合衆國テラマヤ果物蔬菜市場、同キヤリホルニヤ果物組合、ハムモン、果物販賣購買組合、英國ヒヤフォールド果物選別組合) ○組合業務聯絡機關及園藝作物輸出方法の改良策 ○附録 販賣購買組合事業經營法及定款

農學博士 稻垣乙丙君

得業士 三宅千秋君共著

發行所 博文館

日本農事曆

一名農家 年中行事

報知新聞評 一名農家年中行事と云ふ氣候の相違により全國を八區に分ち夫々の氣候の概要及び各月農家に於ける播種栽植其他一切の行事を記述したる好著なり

各地方合本	菊判 洋布 特製 美本	正金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢	(續刊)
四國九州之部	菊判 美本 地圖十五枚入	正金四拾五錢 郵税金六錢	近畿地方……………全一冊
中國地方之部	菊判 美本	正金四拾錢 郵税金六錢	東海地方……………全一冊
北海道地方之部	附 樺太	正金四拾錢 郵税金六錢	關東地方……………全一冊
			北陸地方……………全一冊
			東海地方……………全一冊

新式農家帳合法

福岡縣系島農學校長 山下與之助君著

全一冊 菊判 厚表紙
紙數 百九十頁
正金參拾五錢
郵税金六錢

營業部と生計部とを區別して實際の收支を明ならしめ別に農作物の試験成績を見る方法を附載す未だ他に見ざる新案の好著也

農家業辭典

農學博士 稻垣乙丙君著

全一冊 菊判 上製 函入
紙數 七百二十頁
正金壹圓八拾錢
小包料金拾貳錢

農—行發館文博

農學士 佐々田源十郎君 水野勉君著
賞花百合栽培法 全一冊 菊判
 正價金四拾錢 郵税金六錢
 百合は觀賞用として將た食用として其販路甚だ
 廣く海外に輸出せらるゝものにして年々數
 十萬圓の巨額に及ぶを見るなり之に加ふるに
 栽培容易にて本邦何れの地にも之に適せざるに
 處なきが故に農家に於て餘力を此栽培に分つ時
 は尠くして利多く費す所僅にして益を得る
 事大なり其方に至ては本書其秘奥を披いて直に之を
 細大漏らさず 婦人小兒も卷を披いて直に之を
 知るを得べし。

石川縣農會技師 藤高亨爾君著
粟粟栽培手引 全一冊 菊判
 正價金拾八錢 郵税金四錢
 粟粟の種實は阿片の原料として一種の風味を有し
 として需要多く又葉菜として一種の風味を有し
 觀花用として栽培するのみにして之を世間的に
 高技師の此粟粟の栽培法及び其生産處理法を悉
 切に説明し其有益の植物栽培の普及を圖るに
 止まらず實に國家の利益なるを信す
 (再版)

宇麻農學 千葉敬止君 川井甚平君共著
 校教諭
農家の副業 全一冊 菊判
 正價金貳拾五錢 郵税金六錢
 「目次」蠶細工○竹細工○柳行李○麥稈真田○菌
 糖○麻草○木綿○蔬菜○果實○綠茶○澱粉○酒
 餡○納豆○味噌○豆腐○水蒟蒻○バター輸出用
 物○木醋○椎茸○養蠶○養鷄○養豚○養蜂○畜
 羊○樟腦○漆液
 (四版)

農學士 楠 巖君著
農産製造學 並製四拾錢
 洋布特製金五拾五錢 小包八錢
 本書は左記農産物の製造法を叮嚀懇切に説明す
 ○麥酒○葡萄酒○清酒○砂糖○水飴○藍
 ○纖維○醬油○味噌○納豆○豆腐○蒟蒻○榨草
 ○澱粉○薄荷○茶○臘脂○黃蠟○乳油○乾酪○
 煉乳
 (九版)

類書要重携必家

農學士 齋藤萬吉君 秦三八君著
農家百事問答 全一冊 菊判
 正價金參拾八錢 郵税金六錢
 本書は戦後國民の精勵すべき殖産農業の援助た
 らん事を圖り種々肥料 植物 病蟲 昆蟲
 園藝 蠶草等に關して自ら耕種に從事せる全國
 當業者が疑惑不審の點に付て當局者の説明を求
 めし事項を蒐集し 極めて實際に適合ならしめ
 る地圖を以て説明し懇切に其解を與へたり精密な
 つ斯學に精通せる齋藤農學士の綿密なる校訂を
 經しものなれば 蓋し當業者に取ては此上なき
 き参考要書と云ふべきなり

農藝化學士 柿崎鉄太郎君著
通俗農藝講話 全一冊 菊判
 正價金參拾五錢 郵税金六錢
 本書は柿崎農藝化學士公務の餘暇に於て農業の
 原理より土壤の性質及び肥料の類別成分計算等
 を通俗的に而かも綿密に講明せられたるものな
 れば布くも農を以て業とするもの此書に依て五
 穀豐饒の道を講べば唯に一個人の利益のみに止
 まらず實に天下の一策なりと謂ふべし

農學博士 稻垣乙丙君著
豫知新論 全一冊 菊判
 正價金參拾五錢 郵税金六錢
 近時稻作の豐凶は四五月に於て豫知し得べしと
 論ずるものもあり然れども何れも其根據薄弱にして
 論ずべからず今此書は多年各地測候所の觀測結果
 によりて科學的に此問題を研究し遂に一の豫知
 豫知規則を歸納し得て其規則の事實に合せんと
 能明せしものなれば當に農業者のみに合せんと
 世人の必ず一讀すべきものなり

農學士 西村榮十郎君著 (菊判三百廿三頁)
農用器具學 並製金四拾錢
 洋布特製金五拾五錢 小包八錢
 農用器具學は各國に於ける各種の農具を比較研
 究して其利害得失を論ずるの學なり故に農具學
 中尤も重要な部分を占め農業者の一日も忽に
 予へからざるものなり然るに我國從來完全なる
 著書なきは斯界の遺憾とする所なり本書は我邦
 各地方に於ける農具を勿論歐米の器具に至る迄
 一切を網羅し一々密書を挿入すること無量三百
 以て其利害得失を明かにせり
 (六版)

78
77

島根縣立水産學校長 脇谷洋次郎君著

水産養殖

發行所 博文館

洋裝菊列上製美本
正金八拾五錢
郵税金八錢

大阪朝日新評

題目の如く水産養殖に關し平易に述べたるものにして移動性植物より非移動性植物に至るまで精詳なる圖説を示し詳説したるを以て水産に志す者の資に備へらるべし

内容

第一編 總論 ○水産養殖 ○養殖場 ○餌料 ○原種 ○養殖と農業 ○養殖と人工繁殖 ○養殖に適せる生物 ○養殖の分類 ○第二編 移動性生物養殖 ○通論 ○海水魚及冷水魚 ○造池 ○飼育 ○魚の疾病及害 ○活魚運搬 ○第三編 非移動性生物養殖 ○二枚貝及藻類 ○二枚貝の採取 ○養殖場 ○飼育 ○害及危害 ○二枚貝の運搬 ○伏老 ○煙 ○蠟 ○紫菜

農學士 塚本道遠君著 (全一冊 菊列) ●再版 ●
農學士 井上正賀君著 (紙數三百十四頁) ●再版 ●

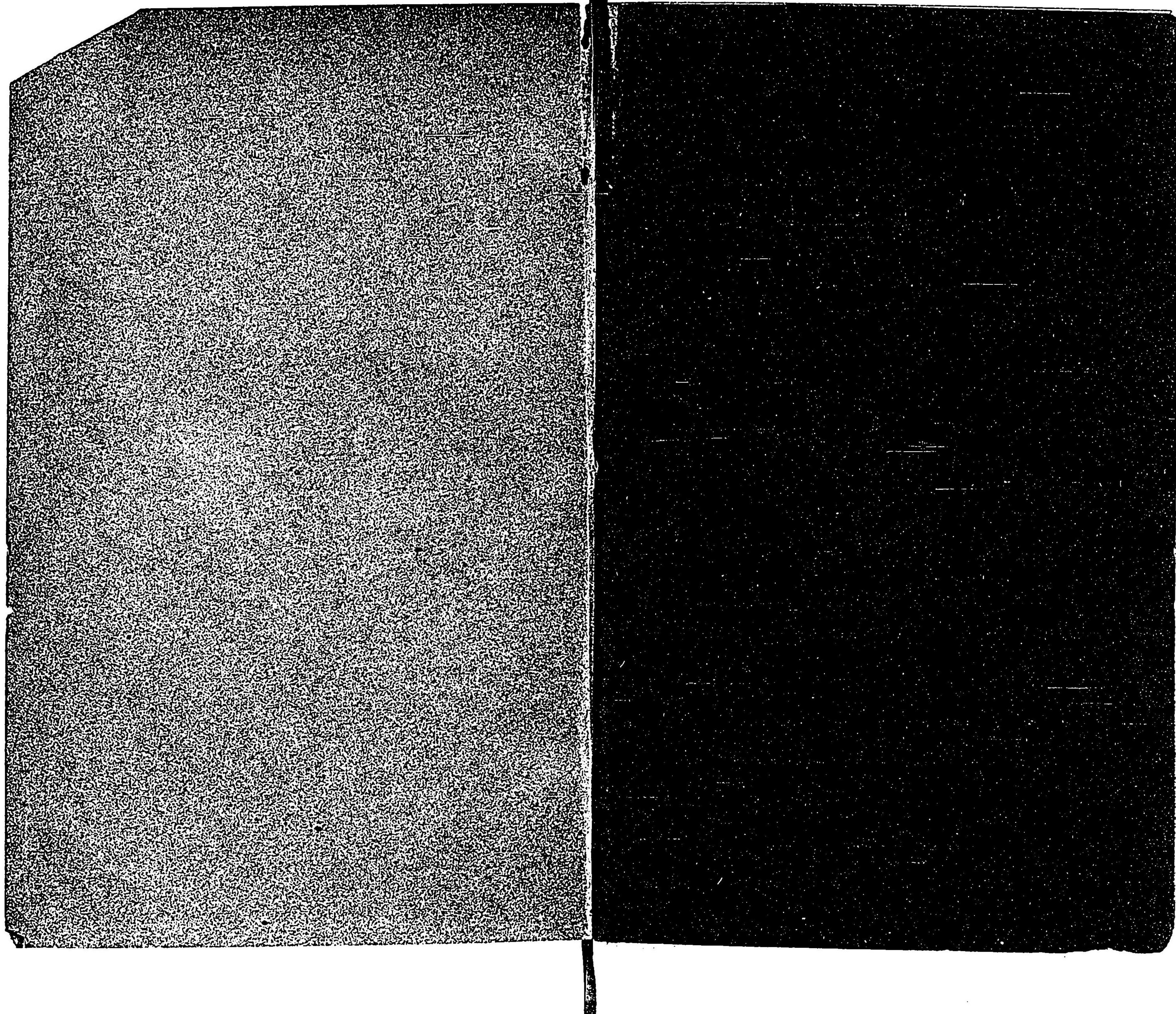
●改訂水産學 郵税金四拾錢 郵税八錢 特製金五拾五錢 小包八錢

「目次」○總論 ○海の賦類 ○魚類 ○諸種の海産動物 ○海産植物 ○海藻の種類 ○漁撈法 ○水産養殖 ○水産物の貯蔵 ○水産動植物の製品 ○水産物の利用 ○水産食品の滋養價值 ○水産と海洋 ○水産業と天候

理學博士 岸上謙吉君著 (四六列 南京級 美本)

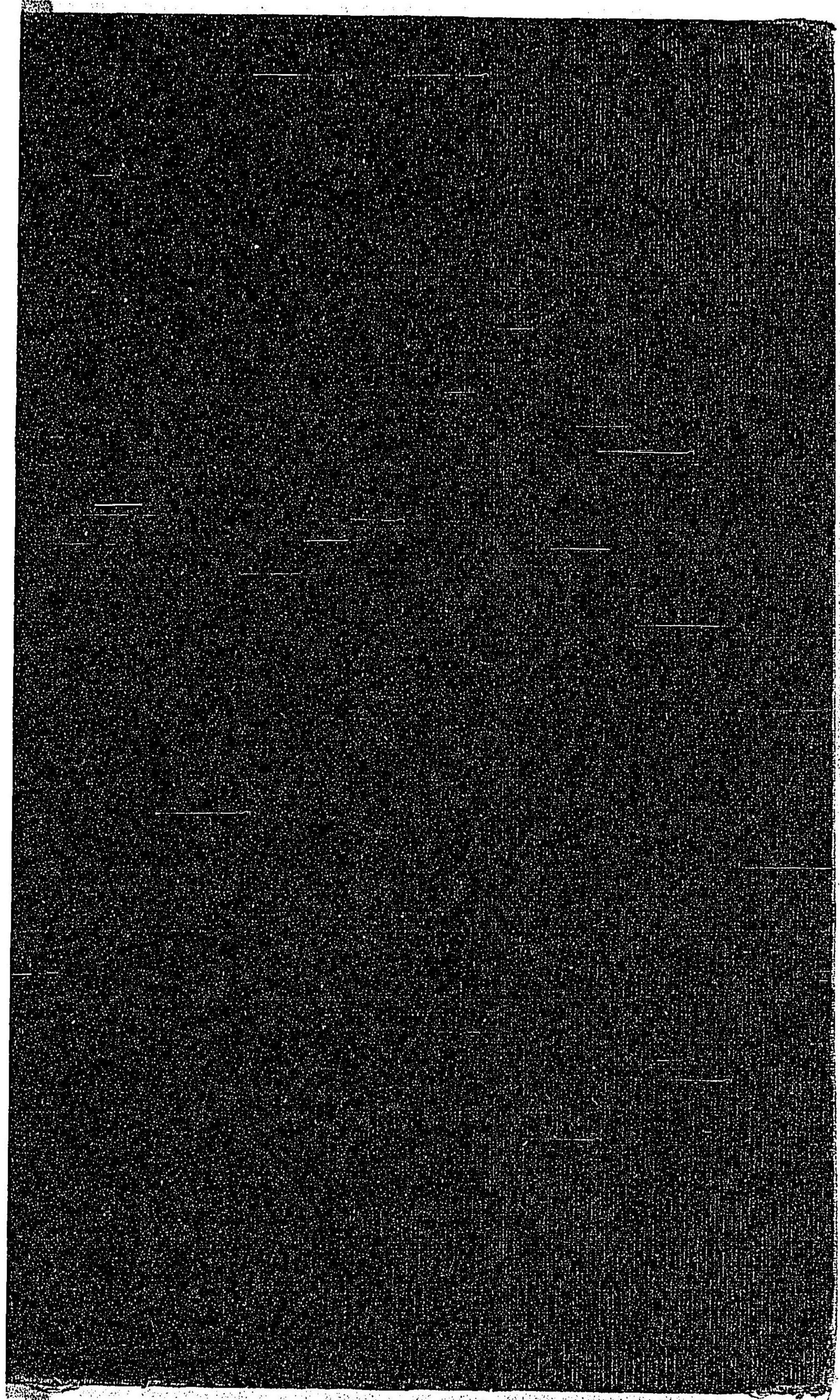
●海と魚 正價金四拾錢 郵税金六錢

中央新聞評 海洋研究の趣味、有力の生物界、魚類の食物、移動、生長、年齢等より漁業、漁具、漁法、漁業者の苦心、危險、保護等に説き及ぼし、讀者をして津々たる趣味の裡に、海事思想を喚起し、我漁魚の忽にす可からざるを得せしむ



78

77



064804-000-4

78-77

实用養鴨法

椋木 市世/編

M44

CCD-0256



